

バンクーバー便り 17

バンクーバー時間：12月3日（日）午前8時20分

日本時間：12月4日（月）午前1時20分

皆さん、今日は。年の経つのは早いもので2023年も最終月になりました。僕たちがバンクーバーに来てからもうすぐ1年になります。日本では冬になるとインフルエンザワクチンの接種の広報もみられることと思います。バンクーバーでもこの時期になるとインフルエンザの予防接種に合わせ、新型コロナのワクチンを接種する人も増えるようです。私も昨年、日本でワクチンを受けてから1年以上になるため、バンクーバーでインフルエンザの予防接種と一緒に受けることにしました。バンクーバーでも予防接種は無料ですが、接種の場所が日本とは異なっています。日本では自治体の設定した接種会場や医療機関で接種してもらうこととなりますが、当地では薬局で薬剤師の方に接種してもらうこととなります。もっとも子どもの場合にはバンクーバー市内に設けられた何か所かの接種会場で実施され、事前に予約をしていきます。7歳の娘は、この会場に出向き接種を受けました。子どもでは接種後の副反応等に対する措置ができるように医療班が待機しているようです。成人では、接種を行っている薬局の中から、利用者に便利な場所にある薬局で予約をします。薬局以外にも大学などの組織団体が関係者に対して実施しています。実施薬局は比較的多いため、予約をして間なしに受けることができます。薬局を訪れますと、カウンターがあり、薬剤師にCOVID-19/Fluのワクチン接種で来店したことを伝え、身分証明などを確認した後にその薬剤師が接種を行います。接種は別室ではなく、薬局の隅っこに衝立で仕切った1畳ほどのスペースに机と椅子が置いてある場所です。私の予約した薬局は表通りに面しており、通り側は大きなガラス窓で、通行人が中を覗けます。そのような場所で上半身裸にもなれませんので、ランニングシャツのような上腕の出しやすい下着を着ていった方が良いと聞かされていました。片肌づつ脱いで左右上腕部にそれぞれ接種してもらいました。薬剤師の方はインド系の若い女性で対応・物腰は丁寧で、注射の技術も申し分ありませんでした。日本では一時期、筋注実施者が不足して、それこそ薬剤師などに応援を求める話が出たことがありますが、バンクーバーでは日本ほど接種希望者多くないのかもしれませんが、このシステムですので打ち手に困ることはないのかもしれませんが。私の注射が終わらないうちに、接種希望者が数名、カウンターの前で待っており、15分間の接種後の観察時間を待たずに薬局を出ました。ちなみにCOVID-19のワクチンはファイザー社製でした。

閑話休題

前からお伝えしたいと思いながら、そのタイミングがなかったのですが、小学校児童のドロップ・オフとピック・アップ(児童の送り迎え)を紹介したいと思います。娘は小学校2年生Grade 2で、子どもの送り迎えは私の役割になっています。小学校は徒歩で10分程度のところにあり、サンセット公園の回遊路を通過して登校します。晴れた日は澄み渡る青空に包まれ、秋にはプロムナードの並木の紅葉と落葉が秋の錦をなし、リスが樹木の間をドングリや栗の実を探して走り回り、カモメやカラスが公園の波立つ草花を分け歩く、など10分間の登校路は自然美にあふれています。学校に着くと、子ども達は校庭の指定された場所に列をなして先生の現れるのを待っています。色とりどりの服装、肌や髪も様々で、送ってきた保護者も子ども達を遠巻きにして見守っています。8時55分に予鈴、9時に本鈴がなります。そして、異なる学年やクラスを担当する先生たちが入れ替わり校舎から出てきます。子ども達は自分たちの先生を見つけると歓声を上げて大きなバックパック

を背で激しく揺らしながら、我一番に笑顔の先生の待つ場所に走っていきます。その様子は子ども達に慕われている先生たちの教師冥利に尽きるのではと思います。15時3分が下校時刻で、僕も子どもを迎えに学校へ行きます。子ども達の送り迎えが毎日となると決して楽ではありませんが、後述のことを思うと苦労はかき消されてしまいます。校舎のドアが開き、様々な学年、クラスの子も子ども達が担当の先生に先導されて現れます。そして保護者は子ども達の出るのを校庭のあちこちで待っています。すぐに親の姿を見つけた子どもは、先生の注意を喚起して親の方を指さし、先生が了承すると子どもはそれこそ燕のように両手を後ろ手に広げ、前を開けたダウンジャケットを風になびかせて、満面の笑顔で親の元に飛び込んできます。親にしっかりと受け止められ、子ども達の顔にはこの世の最高の幸せが溢れています。一方、何かの事情で親の迎えが送れた子どもは先生の指示で校舎の壁に並んで待っています。その時の子どもの顔は悲しく淋しそうで、うつむいて校舎の壁に身を預けています。他の子ども達が保護者を見つけて「ママー」と呼びかけながら突進していく様子を見ておれないほど悲しいのでしょうか。ほとんどの子ども達が保護者のもとに飛び立ち、親のみつからない僅かな子ども達が先生と残っています。そして待ちに待った親が現れると、子どもに光が差したように顔が明るく輝き、先生のゴーのサインも待ちきれないほどの勢いで親元に飛んでいきます。欧米社会ではこの風景は日常的なものなのでしょうが、僕はこの風景を見る度にいつも大きな感動を与えられます。子どもが子どもらしく、親が親らしく、そして先生が先生らしく、全てが自然に優しく心通わせる風景は、学校や家族の原風景を見ているようです。

日本では、このような感動的な登下校はあまり見たことがありません。それどころか、子どもは登校を躊躇し、親は困惑し、先生はなす手もなくみつめているという寒々とした風景ならば思い出せます。かつて日本にもこの原風景はあったらと思うのですが、今は何かがおかしくなっているのだと実感させられます。



晩秋の朝日



木陰のリス



朝霜の中に咲く一輪の花